

花のある山

コマキチ

いつかきっと
君と同じように
いつかきっと
もっと自由になって

いつかきっと何もほしくないと
言う

「忘れることもなく
忘れないこともない」

君の死を超えて
僕の死を超えて
遠い場所に
到着する

誰の評価も気にせず
本当に純粹で
大した能力はなく
それを知っていて
新しいことを知ることの怖さを
始めから分かっている
繰り返されない命に
未練を持たない

僕の体もいつかはなくなり
心もなくなり
とうとう君と会うこともない

「忘れることもなく
忘れないこともない」

一歩歩くごとに
足場はくずれ
背後には
闇さえもない

僕は
懐かしむ権利を
忘れる権利を
失いつける

何もしたくないが
何もしていないと悲しい

時間
流れ続ける時間が怖い
何もしていない間に
夢は手の周りから離れて行く

夢
それさえなければ
この絵の中に
閉じ込めれることもなかったが

太陽が怖い
憂うつな夜も嫌いだ

夜
夜は長すぎる

誰かが喋っているのを聞くのが怖い
いずれその人たちはいなくなって
思い出したくない記憶だけがまわりついてしまう

自分が自分だということが
いいことだったことはないが
昔の自分をいつも
懐かしく思い出す

この輪の中に人が入ってくる
誰かが来ても来なくても関係ない

嫌いになってしまうだけ
現実的でさえあれば全てを

君の精神が隠れている穴に花束が落ちて行く
そこには懐かしむための何かがある

若い娘の死のあとで
そうしたくはなかったにせよ
全てははっきりと描かれて

前と違って魂は逃げず
それはふらついて失神を繰り返す

桜の花が
いたる場所に浮き上がって
歌っている君のように
青い鳥の群れを僕は見ていた

君からの知らせを待ちわびて
花束は眠りを突き刺す

僕を忘れないで
忘れないで
このことから逃れられる
理由などない

ほとんど消えかかったものを通して

あの頃の
今の
延長を繰り返す

何かする前に突然疲れる
世の中で起きていることを想像して疲れる
それに立ち会うのはどんな感じだろうと想像して疲れる

もっといいものがあるはずだと思っていたが
今それはなかったと認めるのが怖い
なりたかった人間にいつかなれると思っていたが
今それがどんな人間なのか見当もつかない

変わったことは
人を憎むようになったことだ

自分があの天使に値しないことを想像して疲れる
天使は存在すらしなかったと認めることはできない

幻を作り上げなければいけなかった自分に嫌気が差す
他力本願な自分に嫌気が差す
利己的な自分に嫌気が差す

友達はいても誰も自分のことを好きじゃない
誰も自分と関わりたがらない
そして分かってほしいと思うのは傲慢なことだ

孤独が孤独を何度も確かめ直そうとする
僕はそれを必要としていないと知っている
僕がついて行けなかったすり潰された時間を

それが存在することをみんな知っている
それがどんな見た目なのかをみんな分かっている
でも誰もそれを用意することはできない

向かって来る足音を聞くたび君かもしれないと思う
ただ一人の恋人から違う何かになってしまったとき
孤独を君が理解することはない

いつもその言葉をなぜか僕は言わない
君がそういう顔するたびその言葉を僕に
言ってほしがっているんだと知っている

僕の世界の上で
何が起きているかを僕は知らない
完全に真っ白かと思うと黒のぐちゃぐちゃに戻る

君は君の痛さの中に
僕は僕の一番冷たい時間の裏側に
逃げ続けたのならば

君は長いあいだ
命のないものを見続ける
光を 木材を
静まり返った窓を

たまには存在しない君に
僕も話しかける
そしてその世話は全部墓場まで持って行く

12くらいの物語
たった12
それがこの荘厳な
山をつくり出す

古い映画の正しい光の中で
女優が言った台詞のように
遠い場所からであればあるほど
何よりも強くおれに訴えかける

辿り着いたものもあれば
辿り着かなかったものもある
実現されなかったことについて
語るのは悲しいことだ

数えられるくらいの数
目に見えるものだけ
それが全て吸い込む
穴をつくり出す

順番を変える言葉を
元に戻す歌声を探して
数えられるくらいの人数の
人たちに触りたい

天使なんかじゃなく

もう彼女の写真だけ更新されず
君だって いつものように暗く
でも明るくて 心を癒やす

価値がないと思って 姿を消すなんて
偉そうなことを 自分だけが
分かると思ってるなんて

僕だって 君みたいに
明るく見えるけど 暗さに裏打ちされた
それは明るさで

世の中に溢れる友人のような身振りも
どれもが蛍光灯を見るように
関係がないとも 敵わないとも思うけど

こんなことになってるわけも分からず
生まれて来る子供の顔でさえ
思い描くことはできないけれど

だけどそれだって 当たり前のことだと
誰かに言われたくて
誰もいない暗やみの中で 音楽で君に僕は話しかけた

完成されなかった

くしゃくしゃの顔で笑いながら 目には涙をためている歌が
本当は完成していて

それが自分の内側にある
黒い世界の中へ溶けてしまっても
それさえも 素晴らしいと

全然関係のない
バランスのある場所で
憎みつくしたこの順番を
愛するようになる日が来る

どういわけか
友達の笑い声は意味がない
特別なことは
本当にその場所に存在している
ときにだけ感じられる

いつも 難しいのは
この大きな空間の中で
居間にいるかのように存在すること
なぜか 僕の目には
月は円でしかない

友達じゃなく

あなたも月を見ているのだろうか
そこではあなたと酒を飲む人もいないのかもしれない
最近では
あなたが生き埋めにされたとは思わなくなった

それでも あらゆる人と存在したあなたにもう
話す相手がないのだろうかと思うとき
ちくちくする混乱に襲われる

あなたはゆっくりとじゃなく
突然一人になってしまった